

中国情報

中 嶋 嶺 雄

孔子と毛沢東

批判のホコ先周恩来に

中国の孔子批判は、さらに激しくなっているが、最近の特徴は孔子批判の一環としての始皇帝礼賛ないし秦王朝内部の復辟(ふへへき)と復辟辟の闘争に關する論議がより前面にクローズアップされていることである。(復辟とは這位した君主が再び君位につくこと) そうしたなかで、先連的^{せんれんてき}な秦王朝の政府機関や文化部門にも「孔子」を世論をくんで上げた「草

命分子を糾弾する方向がますます明白になつてきていることを認めるべく、やはり批判のホコ先は周恩来に向けられつつあり、始皇帝は毛沢東、秦王朝は今日の毛沢東体制をさすのかもしれない。

それにして劉少奇が「修徳」を説くにあたって孔子思想を重んじたとか「林彪という野心家、陰謀家、反徒、売国奴もまた尊孔派である」とか、しきりに言うのは(例えば勃蒙才「毛澤日相見主義

と孔子思想」一頁版一七三年第一一頁)そして次に述べる理由からしてどうもこのつけに思われてならない。

劉少奇や林彪の場合のように、孔産に言及しただけで尊孔派だといつのなら「毛沢東演説」によつても明らかになつて、毛沢東自身もしばしば孔子思想を引用している。もっとも毛沢東は「論語」よりも「孟子」を最も多く引用しているが、しかし「論語」のへき單の言葉「子曰く、学んで時にこれを習う、また説(よめる)ばしからずや」の一句も、毛沢

東の論文にちゃんと引用されているのである(毛沢東「党の作風を整えよう」、一九四二年)。

このような毛沢東だから、孔子についても本来、全面否定ではなかつた。毛沢東が孔子についてふれた最も新しい所見は、おそろしく一九六四年二月に学生たちとかわした次の言葉であると思う。毛沢東はこのときこう述べている――

「孔子の出身は貧しく、羊飼いをし、大学にいっただこともなかつた。彼はまた薬手や死人が出ると笛をふき、鼓を打つた。会計にもなつた」とがある。琴を弾

き、矢を射、馬車を御すことを言た。小さい頃から大衆の中で育つてきたので大衆の言ひをいづくから知つていた。のちに魯の國で信融に就き、大インテリとなつてから、大衆のことは聞けなくなつたが、多分それは彼の用心算の手路がいて大衆を近寄らせなかつたのである。

孔子の伝統をすてはいけない。我々の方針は正しいのだが、方法を間違つている」(毛沢東「教育工作」についての春節の指針)、那取、中嶋嶺雄編訳「毛沢東公開重要資料(続)」一「中央公論」六九年八月号。

このような毛沢東の孔子評価からすれば、今日の孔子批判は明らかに毛沢東擁護の姿勢と矛盾するし、そのまを「子曰く、三の「論語」の現代版」で「毛沢東演説」ではないのか。孔子とその弟子は毛沢東と宮廷派幹部たち(王洪文、張春橋、姚文元、江青等)のことでないのか。つまり孔子批判は毛沢東批判ではないか、との推論も不可能ではない。

しかし今日の孔子批判、始皇帝評価の全体のトーンは、やはり毛沢東の擁護の擁護と脱文革化への抵抗を意味するものであると思われず、少なくとも現時点ではこのように推論する方がより論理的だと言わざるをえない。

(東京外大助教)